



東日本大震災とレジリエンスを 引き出す災害後のコミュニティ支援 ——「物語」をキーワードに——

村 本 邦 子
(立命館大学)

Community Support for Resiliency in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake: “Story” as a Keyword

筆者らは、東日本大震災を受け、十年間、毎年、東北4県にある複数のコミュニティでプロジェクトを実施し、被災と復興の証人 (witness) になることを目指してきた。ドイツに学び、歴史のトラウマに関わるなかで、重要なのは証人となることに尽きると考えてきたためである (村本, 2015)。人は、誰かの記憶に刻まれて初めて存在することができる。死者は弔われねばならず、生者は関心を向けられ続けなければならない。被災地を訪れ、人々と顔の見える関係を結び、それぞれが生きてきた人生の豊かさとともに、被災と被害がもたらした影響、それを生き延びている今を記録し、記憶しようと考えた。

それまで関わりのなかったコミュニティに足掛かりを作り、人々との出会いを可能にする舞台設定として、団士郎による漫画「木陰の物語」のパネル展示と支援プログラムを組み合わせ、東日本大震災との関わりを仄めかす「東日本・家族応援プロジェクト」という看板を掛けた。現地にパートナー機関を見つけて協働を続けている。舞台設定には図と地がある。図の部分、すなわちプログラムでは、対人援助のプロフェッショナルとして、地域にとって意味のある装置として機能するよう努め、地の部分では意図的な介入に付随して生じる縁起に開かれることを心掛けた。これらは、南京における出会いのワークショップの経験から導き出したことである (村本, 2014)。こうして、図と地を合わせたところから証人としての体験を積み重ねてきた。

被災地の人々の「小さな物語」を聴き取って集積

し、そこで発生する「共創する物語」を通してコミュニティの復興を支援する実践の試みと言い換えることもできる。本企画では、プロジェクトの成果を「物語」の観点から検証し、大規模災害におけるコミュニティ支援について考察する。初めに、村本邦子が、大目標として掲げた証人の観点から、ショートストーリーという形で被災と復興の物語を描写し、コミュニティのレジリエンスと外部支援について論じる。次に、団士郎が、舞台となった漫画「木陰の物語」がどのような役割を果たしてきたのかについて、マンガ、ギャラリー空間、物語といった広い文脈とともに論じる。さらに、斎藤清二が、本プロジェクトのスピノフ企画として実施された「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」による声の分析から「木陰の物語」が人々の心に喚起するものを明らかにする。併せて、鶴野祐介が、プログラムの一環としても取り入れてきた民話の持つ力について、レジリエンスの観点から考察し、中村正が、地域の支援力を活性化することを目指してプログラムに取り入れてきた支援者支援セミナーの内容を紹介し、地域を基礎にした支援者支援と多職種連携を考察する。

本研究は、人生に意味を与えるのは物語の力であるという立場に立ち、ホワイト (2012) が治療実践の目標として掲げたようなセラピストの声の脱中心化と非規範的活動を行いながら、多義的なリフレクションを繰り返すなかで、多声的な記述と理論化を行うことを目指している。そのため、伊藤・矢守

(2009) に倣って、企画全体を俯瞰する超越的な視点をあえて想定せず、複数の書き手がそれぞれ立脚する複数の意味のシステムを可視化する方法を取るが、多義的なりフレクションのために、本プロジェクトについてまったく関りのない第三者である川野健治と澤野美智子にコメント論文を書いてもらい、これらを全員で共有したうえで、座談会という形で、対話を深める工夫をした。今後、読者がこれに加わり、さらに多声的な論述となっていく可能性に期待したい。

引用文献

- 伊藤哲司・矢守克也 (2008) 「『インターローカリティ』をめぐる往復書簡」質的心理学研究第8号 43-63 頁
- 村本邦子 (2014) 『日中戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラムの開発～国際セミナー「南京を思い起こす 2013」の記録と HWH7 年の成果』立命館大学人間科学研究所 (インクルーシブ社会研究 1)
- 村本邦子 (2015) 「臨地の対人援助学—『東日本・家族応援プロジェクト』から見る東日本大震災の復興の物語」村本邦子, 中村正, 荒木穂積 (『臨地の対人援助学』晃洋書房 1-8 頁
- ホワイト, M. (2012) 『ナラティブ・プラクティス - 会話を続けよう』小森康永・奥野光訳

(2019. 12. 3 受理)

(ホームページ掲載 2020 年 4 月)